歴史と哲学

雉本時哉

一

歴史と哲学との関係について考えて見よう。先ず歴史について。

歴史という語は、使い方によって、広狭いろいろの意味がある。最も広く解釈すれば、宇宙間に存するあらゆるものはすべて歴史的経過をたどっているといえる。否、実は宇宙そのものが、昔から今に至るまで変化しつづけていることは、天文学の教える通りである。無数にある星のどれを取って見ても、皆発生し滅びゆくものである。太陽もいずれは滅びる運命にあると聞く。ただそれらのものの変化に要する時間が、普通に考えられる時間にくらべて、比較を絶する程にながいため、日常においては、意識にのぼって来ぬにすぎない。このような長い時間かかって大規模に行なわれる変化については、一まずおくとしても、われわれの住む地球、銀河宇宙の太陽系のなかの一遊星である地球自体も、遠い過去において、ある事情のもとに発生し、それ以後いろいろの変動を重ねて現在に至っている。この日本自体にしても、現在の形になるまでには種々の変化を経ていることは今更いうまでもない。昔は大陸とつながっていたとか、現在山であるところもかつては海中にあったとか、いうようなことは、地質学の教えるところである。この変動しつつある地球のある時期、ある条件下に生物が発生し、そしてその生物もまた、地球の変化に適応しつつ、進化や退化を重ねて現在に至っている。人間もまた例外ではない。このように考えて来ると、宇宙そのもの、そしてそこに現実に存したもの、また存するもので、時間とともに変化して来なかったもの、又変化していないものは、何一つないといわねばならぬ。

もし時間とともに変化することを歴史的経過といい、その歴史的経過を歴史と呼ぶことにすれば、歴史学は宇宙そのもの、又宇宙間の現実存在すべてを研究せねばならぬことになるが、事実はそのようには考えられてはいない。もちろん宇宙の歴史、地球の歴史、生物の歴史という語

を使っても、充分その意味は理解されるし、又事実そのような使い方もなされていることは否定しがたい。このような歴史という語の使い方は、歴史の広義によるものといえようが、しかし普通に歴史といえば、人間に関するできごとについて語るものと解されるのは、今更特に説明の要はない。同じく人間に関するできごとながら、有史以前とか先史とかいういい方もある。この時、如何なる歴史を規準にして、以前とか、先とかいう語を使うかといえば、周知の通り、文献的史料によって明かにされ得る歴史を規準としている。従って有史以前といっても、そこには人間に関するできごとがなかったというわけではなく、ただその時代については、遺物、遺跡を中心に主として考古学的研究をするより外はない時代ということであろう。このように考えられるとすれば、先史をふくめて、歴史とは人間に関するできごと、即ち人間の営みについて語るものというのが、普通の使い方といってよいであろう。

しかしここでいう人間とは何を意味するか。この問題をたち入って考えれば、それ自身哲学の重要課題となるであろうが、今そこへ立ち入ろうとするのではない。今ここで問題としようとするのは、人類発生の事情に照らして、どの辺のところから、先に述べた意味での歴史を語り得るのかということである。現在までに発見された化石人類は、古い順に原始人類と現生人類とに分けられ、前者はさらに、原人（または猿人・先行人類）と旧人（または原生人類）とに分けられ、現生人類はいわゆるホモ・サピエンスで、旧人に対して新人とも呼ばれるとのことである。これらは皆化石人類の話で、これらの人類が如何なる生活をしていたかは、確実には分りがたく、従って彼等に関するできごと、彼等の営みが如何なるものであったかは、確実には知りがたい。従ってこれら化石人類については、普通の意味の歴史は語り難いであろう。しかし先史時代の人類が道具を使うようになり、道具が遺物として存するようになれば、それを通じて、当時の人類の営みを推察し得るようになり、このあたりから、おぼろげながら歴史を語り得るのでなかろうか。

チンパンジーも道具を使い得るといわれている。チンパンジーの生活行動を調査研究している学者のグループが、アフリカでチンパンジーが群居しているあたりに、豹の模型をおき、もの蔭から、チンパンジーの反応の様子をテレビ撮影した、そのビデオを私は見たが山中の林の中にいるチンパンジーと平野にいるチンパンジーとでは少し反応の仕方がちがう。前者の場合には、豹を見つけると、それぞれのチンパンジーは互に警戒の声を発しつつ、われ先にと木によじ登り、豹から目を離さず大騒ぎをする。そのうちあるチンパンジーは小枝の先に出て、それを揺り動かしながら豹の様子をうかがう。もちろんこの間十匹近いチンパンジーのけたたましい叫び声は絶えることはない。そのうち勇敢な雄のチン

パンジーは木から下におり逃げ腰半分で前に出ようとするが、やはりこわいのか木へ登ってしまう。又下へおり前に進むが今度は前の時より豹に接近する。そしてその辺にあった相当大きな木の枝を持って進むが、しかしまだそれで豹を打つことはようしない。それが逃げ遠ざかったあと、他のチンパンジーが木の枝というより相当太い木の棒をふりあげ、恐る恐るながら豹の頭を殴りつけたと思う間もなく逃げ去る。その時、両手で棒を頭の上に水平にかざしながら、じりじり豹に近づく姿は、チャンバラ劇の勇士そのままで興味深い。こんなことを二三度繰り返えしたあと、だんだん皆は豹に近よる。その時分には少し離れたところながら、赤ちゃんを抱いた雌チンパンジーもじっと様子をうかがっている。多分雄であろうが、二三匹のチンパンジーが豹に接近し直接殴って見る。それでも豹は動かない。何だか変だという顔つきで一匹が指先で豹をさわり、その指先を自分の鼻先に持って行って、臭いをかぎつつ一寸考える風である。もうこの時分には叫び声もあまりかまびすしくはない。

このビデオを見て私の注意をひいたことは、一群のチンパンジーは危険を前にして、互に警戒の叫びを発しつつ、恐怖の様子を見せながらも、直ちに逃亡してしまわず、逃げ腰半分ながら、徐々に攻撃の姿勢を加えつつ敵に向って前進して行くこと、そして一匹も群を離れて、敵前逃亡を企てることのなかったこと、特に大事なことは、適宜攻撃用の資材を利用しつつ敵に当ることであった。即ち、周囲の事情に適応しつつ立派に道具を利用する能力のあることであった。平野にいたチンパンジーは、豹を見つけても、林の木々に登って逃れることはできない。同じく警戒の叫びを発しつつ大騒ぎをするが、直ちに一群は集合する。その中勇敢なのが逃げ腰半分で豹に接近しはじめ、しまいには、棒を持って殴りかかり、ついにはじかに殴りつけること、そして臭いをかぎ考えること、その時分には、赤ちゃんを抱いた雌がやや離れたところで様子を見ていることなどは前の場合と同様であった。ただこの場合、豹の首はリモートコントロールによるのか、自動的に左右に動くようになっていた。それだけに、チンパンジーの警戒は強かったようだが結局、豹に接近し棒でたたき手で殴っているうち、その首が胴から離れてしまった。豹に接近していた二三のチンパンジーは、如何にも凱歌をあげた様子で、少し離れて互に寄り添いつつ様子を見ていた一群のところへ、それをころがしつつ持って行った。この場合にも敵前逃亡を企てるものはなかった。

以上で、彼等は敵を前にして共同すること、巧みに道具を使うことが明かにされた。チンパンジーですらこのようであるから、原始人類もこのようなことは当然できたにちがいない。チンパンジーはその辺にある資材を利用して、その時々の事情にあうように、その資材を道具として使うことはできても、あらかじめ自分のおかれるべき状況を思い描いて、そこで有効に使い得る道具を、与えられている自然物、例えば石を材

料にして作ることは、多分できないであろう。石を打製して、打製石器すら作る能力はないであろう。原始人類はそれができたと思われる。否それができるようになった人類は、まさにこの道具製作能力という点で、チンパンジーとは異った段階に達し、まさに人間としての営みに踏み入ったということができる。そしてこのあたりから、普通の意味の歴史が語られ得るのではないかと思われる。たとえ簡単な打製石器にしろ、それを製作し得るという事情をよく考えて見ると、相当重要な事柄が伏在しているように思われる。

先ず今後において自分がおかれるべき状況を想定し得る能力、たとえそれが一瞬の後の状況であろうとも、現在と異った状況を想定し、その状況において、自分がやろうとする事柄を成しとげるためには、何があったらよいかを見通し得る能力がなかったら道具は製作し得ない。このように今後の状況を想定し、それに応じた必要を考え得るためには過去の経験がその時その時に消え去ってしまうのでなく、機に応じて思いだされなくてはならぬ。この保持された過去の経験と、未来の状況とを現在のおかれた事情のなかにおいて、つきあわすことによってはじめて適当な石を利用して、石器を作り得るといわねばならぬ。如何に原始的であろうとも、そこには過去・現在・未来という時間意識がなかったら、道具製作という行為は不可能である。私はこの時間意識こそ、人間の営みの根幹をなし、従って、この意識のあるところ、そこにはじめて普通の意味の歴史を語り得るのでないかと思う。

二

カントは、その著「道徳形而上学への基礎づけ」において「自然の一々のものすべては、法則に従って働く。ただ理性的存在者だけが、法則の表象に従って、即ち原理に従って行為する能力、いいかえれば意志を持っている。」といっている。このいい方にならえば、「宇宙のものすべては、時間に従って変化している。ただ理性的存在者だけが、時間の表象に従って行為する能力を持っている。」ということができる。時間の表象に従って行為する能力を持つ理性的存在者、かかる人間に関してのみ普通の意味の歴史を語り得るといえよう。道具製作能力を持つようになった原始人類は、先に述べた理由によって如何に幼稚であろうともこの段階に達しており、従ってその営みについて歴史を語り得るといい得る。道具製作能力があるということは、如何に原始的であろうとも、思惟能力ありといわねばならず、その意味でやはり理性的存在者、少くともその萠芽的存在であるといい得る。この点を考慮すれば、普通の意味の歴史は理性的存在者についてのみ語り得るということができる。時

間意識、思惟能力、理性、これらは相伴うものといい得べく、それらを共に持つ人間の営みに関して、普通の意味の歴史は語られる。そしてこのような段階に達した人間は、如何に簡単であろうとも、言葉を使い得た筈で、この点を考慮にいれれば、今あげた三者に言葉を加えて、四者は常に相伴うものといえよう。更に考えれば、道具製作能力があるということは、如何に簡単であろうとも、このようなことにはこのようなことが必ず伴うという、事物の連関、少し強くいえば、因果的つながり、その意味で幼稚ながら法則の意識も芽生えていたといわれよう。そうすれば、カントとともに、法則の表象に従って、即ち原理に従って行為する能力、いいかえれば、意志をも持っていたといい得よう。そうすれば今あげた四者の外に、更に意志を加えて、五者は相伴うということができる。事情はこのようであるが、私は今は特に時間意識を中心にして考えを進めて来たのであり、また進めて行くことにしたい。

ヤスペルスはその著「哲学入門」において、歴史には四つの大きな切れ目があるという。

第一の切れ目は、言語の発生、道具の発明、火を燃やし且つ使用するようになった時代でこの時代に人は単なる生物学的人間ではなくて、はじめて人となり、ここに歴史の基礎はおかれたといえる。そしてこれから後、人が記録を持つようになるまでの長さは、それ以後の長さに比べれば比較にならぬ程の長さであった。有史以前の時代は有史以後の時代に比し問題にならぬ程の長さであった。以上のようにいっているが、火の使用ということ以外は、大体私が先に述べたと同じことをいっていると見てよい。道具の利用といわず、道具の発明（Erfindung）といっているところに注意すべきであるが、もっと適切には道具の製作というべきであることは、前述したところから明かである。

序でながら、ヤスペルスのいう第二、第三、第四の切れ目についても、簡単に付言して話を進めることにしよう。

第二の切れ目は、紀元前五千年から同じく紀元前三千年の間に、エジプト、メソポタミヤ、インダス流域、少しおくれて黄河流域に高度の古代文化が発生した時代。この頃には多分人類は全地球上に拡がり住んでいたであろうが文化はほんの一部にしか発生していなかったといってよいであろう。

第三の切れ目は、紀元前五百年頃を中心に紀元前八百年頃から紀元前二百年頃に至る時代。この頃に人間の精神的基礎、しかも今日に至るまで、それによって人間が養われているような精神的基礎が築かれた。それは、中国、印度、ペルシャ、パレスチナ、ギリシャにおいて、同時にしかも独立に築かれた。

第四の切れ目は、科学的・技術的時代、これは中世末期以後、ヨーロッパにおいて基礎が築かれ、十七世紀において精神的に組織され、十八世紀末以来広く発展しこの数十年以来急速な進歩をとげたもの。

以上四つの切れ目のうち、特に注意すべきは、第三の切れ目で、ヤスペルスはこの時代を歴史の軸をなす時代と見ている。この時代になって、人間は存在全体を、それとともに自己自身を知り、又その自己の限界をも知るようになったということができる。人間は世界の怖るべきこと、他方に自分自身の力無さを知り、解放と救いとを求めるに至り、世界宗教が生れ、人々はそれによって今日まで生きている。

この時代を私なりに説明して見れば、理性がはっきりと働くようになり、神話的な考えから合理的な考えへ、そして経験によってたしかめることができ、いわゆる前論理的思惟から論理的思惟へ、概念的合理的思惟へと移り、或程度認識批判さえできるようになって、自覚的存在者、理性的存在者としての人間の面目が発揮されるようになった時代ということができる。もちろんそれ以前から、前に述べたように、人は理性的存在者であったにちがいないが、この時代になってはじめて、その実が充分あらわれるようになったといい得よう。いいかえれば、人がほんとうに人らしくなったのはこの時代からといってもよいであろう。

歴史というものを、自覚的存在者・理性的存在者としての人間の営みに関するものの意味にとるならば、本来的な意味での歴史はこの時代から始ったと見ることができる。そのためヤスペルスはこの時代を「軸の時代」(Achsenzeit) と呼んだのであろう。歴史はこの時代を軸として廻転していることを意味したものと思われる。

三

歴史については一応これ位にして、次に哲学について。

哲学は昔から驚きから起ったといわれていることは周知の通りである。驚きから問が起り認識が起る。認識が得られれば、ことは一応解決したように見えるが、しかしこの認識ということ自体が問題となり得る。われわれ人間の持つ認識能力によって、果してことの真相が捕えられるかという問題である。ここに懐疑論が起り、それに関連して認識批判がなされるようになる。しかしこのような驚き―問―認識―懐疑―批判の系列といった、いわば理論的な線にそって起る哲学以外に、もっと実践的に現実の生活そのものに即して起る哲学がある。現実に身を処して見

ると、至るところにおいて、われわれはわれわれの無力を痛感せざるを得ない。われわれの現実生活はいろいろの状況に応じつつ営まれて行く。そしてわれわれはこの状況をわれわれの都合のよいような方向に向けながら生活して行く。しかしわれわれの力ではどうしても思うようにならぬ状況というもの、いわばどうしても変えられぬ枠組、どうしてもその外には出らぬ限界線というものがある。たとえば、われわれは死なくてはならない、とか、われわれはさけがたく罪にまとわれている、とかいったような状況、いわゆる限界状況においては、われわれは如何にも自己の力なさを身にしみて感ぜざるを得ない。この無力感を通じていろいろ哲学がよびさまされる。このような哲学は実践的に、現実生活に即して生じた哲学ということができる。ところでここにいう現実とは、決して対象的に固定的に捕えられるものではない。われわれがそこにおいて生れ、そこにおいて死んで行くものであり、人の営み、人の行為、人の生活がそこにおいてなされるところであるとともに、又それらを通じてつくられ、発展させられ、又建設されて行く。そしてこれらのことによって歴史はかたちづくられて行く。従って詳しくいえば、ここにいう現実とは歴史的現実にほかならない。実践的現実的生活に即しての哲学とは、結局歴史的現実に即しての哲学ということができる。

ところでここまで考えて来ると、驚き―問―認識―懐疑―批判の線によって生ずる、いわば理論中心の哲学も、実は歴史的現実に即しての哲学に入れて考えられねばならぬ。何故ならば、驚き―問―認識―懐疑―批判ということも、実はわれわれの実践的現実生活における一面といい得るからである。今は詳しく立ち入るゆとりはないが、理論的なものは、実践的歴史的現実生活の一横断面とも見ることができ、知的理論的なものは、実践的行為的歴史的なものの一面の固定化されたものということができるからである。理論理性に対して実践理性の優位がいわれるのもこの関係からである。このように考えれば、哲学とは歴史的現実に即しての哲学のほかにはなく、歴史的現実の柱となるもの、これが哲学だということができる。

四

ここに歴史と哲学との密接なかかわりあいがある。

歴史は、狭い意味又はそれの中心的意味からすれば、自覚的存在者・理性的存在者としての人間の営みのあとを記録したものということができる。従って一応歴史は過去の事実に関するものといい得るが、歴史に書かれている営みや事実そのものに即し、それらの動きそのものに身を

おいて見れば、そのように簡単にはかたづけられない。歴史を理解するということは、われわれ自身をその時代、その事件のなかにおいて、身自らその中で暮らしている思いに徹しなければ、充分その目的を達し得ない。もちろん、時代なり事件なりに没入しているときは、その前後の事情が分りがたく、それらを全体的に把握できないため、一定の時間的へだたりを置いて見ねば、それらの事柄の意味は理解しがたく、従ってその意味で「歴史が証明するであろう」といういい方がなされるのも、尤もとされねばならぬが、しかし、一定の時間的へだたりをおいて、過去のことがらをよそよそしく単に傍見するのみでは、それらを充分理解し得ないことも否定しがたい。人間の営みのあと、歴史に現れた過去の事実も、よく考えて見れば、当時の人々の体験の表現でないものはない。従ってわれわれがその体験を追体験して、できる限りその体験をわれわれのものとしてのみ、それらの営み、それらの事実がはじめて理解され得るといわれねばならぬ。ここに歴史を単に過去のこととして、かたづけ得ない理由がある。というのは、当時の人々の体験、もっと一般化すれば、およそ人々の生活は単に過去にかかわるということだけではなされ得ないからである。ここにはじめに述べた時間の表象に従って行為する能力を持つ理性的存在者としての人間にだけ、歴史が語られるということが想起されるべきである。

このように、時間表象に従って生活する人間の生活なり、体験なりは決して単に過去にかかわるというだけでなされるものではない。自分が現在おかれている状況は、過去からのいろいろの因縁の集積したものといえるが、その状況の中にあって生活行動や生活体験をするということは、過去からの集積である状況をよく顧みて、それに適応するよう未来に向って一歩を踏み出すということにほかならぬ。現在、ある状況のなかに立ちつつ、即ち過去からの集積のなかに立ちつつ、問題解決に力めるとき、その人の眼は未来に向けられている。問題は今は解決されていないが、これから解決されるべきものとして、いわば未来から語りかけられているのである。ある問題は解決の公算が大きく、その人に輝かしい生活を約束するような希望を抱かせる場合もあるし、又問題によっては、解決の見込少く、極端な場合には、その問題は結局その人を滅亡させてしまうかも知れぬ不安や怖れを抱かせながら、しかも何時までも放置しておくことは現在の状況が許さないということすらある。このように、われわれは、過去からの集積と見られる一定の状況である現在に立ちつつ、希望又は不安を抱きながら、未来からの語りかけに応答して、未来に向ってある意志決定をしてある行為に踏み切るのである。われわれは過去からの集積という如何ともしがたい必然を負いながら、未来の可能性に対して、現在において、決断し行為して生活しているものといえる。簡単にいえば、われわれは現在において、過去の必然と未来の可

能とを対決せしめ、自己の決断と行為とを通じて、必然を可能に転化媒介しているものといえる。

このような事情であるとすれば、時間はたとえば熔岩が山肌に添ってじりじりと押し下るように、すべて過去からの圧力によって、現在がそして未来が決定されて行くというようにだけには考えられない。もちろんそのような考え方も可能であり、又事実成立していることは否定し得ない。はじめに述べたように、宇宙そのもの、地球そのもの、生物そのもの、否人間そのものすら単に生物的人間として見られる限りは、このような時間に支配されて、過去からの必然に、いいかえれば一定の法則に支配されて何等の自由の余地なく一定の経過をたどって来、又たどって行くものといい得る。宇宙間のすべては時間的経過をたどっているといったのは、この意味においてであった。生物、特に霊長類といわれる高等な生物にあっては、或は決断の萠芽、自由の萠芽は見方によってはそのきざしありとなされるかも知れぬが、大体論としては以上のようにいってよいであろう。ところがここでは普通にいわれる歴史は語り得ない。

時間表象、時間意識を持つようになった人間にあっては、現在に立ちつつ、過去と未来とを対決せしめ、決断と行為とをもって生活する。ここには如何に原始的であろうとも、思惟の働きがある。たとえその思惟が前論理的のものであろうとも、思惟の働きがあると見ねばならぬ。そしてそこには、状況と自己或は環境と自己、また自己と他、または自己と自己との対立がたとえ明確でなく、強くいえばそれらがなお融即し、それなればこそ、前論理的思惟の立場にあるといわれようとも、とにかく思惟の働きはあると見ねばならぬ。それでなかったら、トーテムもタブーも意味をなさぬ。タブーがタブーとして働き得るのは、そこに何等かの決断と行為とがあるといわねばならぬ。いやしくも、理性的存在者といわれる限りの人間にあっては、過去と未来とが現在において対決されるということがなければならぬ。ここにはじめて自由主体としての人間があり、そこにはじめて歴史が語られ得る。

時間に関して、次のような考え方がある。われわれの時間体験としては、現在があるだけである。未来はまだ来ていないし、過去はもう過ぎ去っていてこれもない。いわゆる過去とは、現在において回想されたものにすぎず、又いわゆる未来とは、現在において期待されたものにすぎず、過去といい未来というも、実は、現在からの回想と期待にすぎず、体験としては、過去も未来もいわば現在に内在し、あるのはただ現在のみといわねばならぬ。たしかにこのことは否定し得ないであろう。だからといって、回想された過去が現在において思うままになるものではなく、また期待される未来も、現在において隅から隅まで見通がきくわけではない。この点においては、回想された過去も、期待された未来も、

現在のなかに盛り切ってしまうわけには行かず、現在を超越している面を認めざるを得ない。起ったことは起ったことで、今更仕方がないとか、一寸先は闇とかいうのもこの辺の事情をいうのであろう。過去が後悔の種となり、未来が憂慮のもととなるのもこの故であろう。それなればこそ、過去の必然を負いつつ、現在において、未来の可能性に対し、希望をまた時には憂慮を抱きつつ、最善と思う方向に、決断し行為して進み出るというわれわれの生活の営みが成り立つ。われわれはこのような時間表象、又は意識に従って営みをつづける。ここに歴史が語られ得る。

現在のなかに立ちつつ、過去を顧み未来に対処するところに歴史があるとするならば、現在の状況が変れば歴史も亦変って考えられるということがでて来る。事実歴史は絶えず書き改められている。又現在に対して未来も過去も超越しているという面から考えれば、人が重大事件に対処するとき、神に祈りをささげ、又過去の所行に対して懺悔せざるを得なくなるのもよく了解される。

以上によって、われわれの生活は、現在において、過去の必然と未来の可能とを対決せしめ、決断と行為とをもって営まれること、場合によっては自己の全運命をかけ、滅亡の危険を冒してまでも、そのようにせざるを得ないことなどを述べたのであるが、しかし二六時中われわれの生活がそのようであるというのではない。運命をかけてという程でなくても、決断という程の意識さへ表面に浮び出ることは少いともいえるかも知れぬ。少し誇張していえば、大体においてわれわれは前に述べた例のように、熔岩が山肌をじりじり流れ下るように、すべて過去の必然に押し流されて生活しているともいえるかも知れぬが、しかしこれだけならば生物的人間とはいえても、時間表象に従って生きる理性的人間とはいえず、ここには普通の意味での歴史は語り得ない。宇宙万物、否宇宙そのものが、単に時間的経過をたどり、一つの連続的変化をなし来っているにすぎず、そこに理性的人間のなす営みが考えられないというのは、如何なる事情によるか。考えて見るに、宇宙そのものにしろ、又銀河系宇宙にしろ、太陽系にしろ、地球にしろ、生物にしろ、そこには、それぞれ、宇宙そのもの、銀河系宇宙、太陽系……といった存在の基体が考えられ、その基体の連続の上における時間的変化、これがこれらのものの時間的経過といわれるものである。簡単にいえば、有的連続的基体の時間的経過が意味されている。ところが、理性的人間の時間表象に従っての、現在における過去の必然と未来の可能との対決決断による行為は、このような有的基体の時間的経過というだけでは説明しがたい。そこには人間の行為として、人間という有的基体があるではないかといわれるかも知れぬが、このような面だけから考えて行けば、単に生物的人間の生物的変化が考えられるだけであって、ここには普通の意味の歴史

は語られ得ない。

過去と未来との対決決断というとき、実はこの有的基体は破られて、いって見ればそこに無的なものがひらめかねばならぬ。理性的存在者とは、有的基体を破って、無的なものにふれ得る存在者であるともいい得る。このようでなかったら、変化ということはいい得ても、対決、決断ということはいい得ない。自己を空しくせねば、決断し得ぬといわれるのもこのことをいうのであろう。現在において過去と未来とを対決して決断するというとき、実は、現在に捕われていたり、過去にこだわったり、未来にひきずられていては、真の決断はできない。現在において決断はなされるといいながらも、実はその現在が破れて無的なものにふれなければならぬ。時のなかで決断がなされるのにちがいないが、しかし一方で時を超え、いわば時が破れて、無的なものにふれなければ、決断はなしがたい。自己を空しくし、時のなかにありつつ、時を超えて、無的なものにふれるということは容易なことではない。ここに重大決断にあたって、神仏への祈願、又卑近なところでは、占いに頼る現象の起るのも理解しがたいことではない。理性的存在者なればこそ、祈願、占いをなすものとさえいってもよいであろう。ところでこのようにして、有的基体が破れ、時の中にありながら、時が超えられ、無的なものにふれられればそこに世俗が超えられて、何等かの意味で永遠的なものにふれざるを得なくなるということができよう。時間的表象に従って生活を営む理性的存在者は、逆説的に見えるかも知れぬが、却って時間を超えて永遠にふれ、何等かの宗教性を持たざるを得ないものともいうことができよう。もしそこまでに至らなかったならば、その理性的存在者は、まだ充分理性的存在者になっていないものと見るべきである。理性的存在者がこのようなものであればこそ、懺悔ということもよく理解し得る。懺悔は単に世俗のなかだけでなされるものでなく、何等かの意味で、神的なるものの前においてはじめて意味を持ち得るものだからである。理性的存在者とは、又この意味で、懺悔し得る存在者ということができる。

以上のような意味での理性的存在者の営みに関してのみ、普通の意味の歴史は語られ得るといえる。従ってこの意味の歴史は、ある何等かの有的基体の時間的変化というだけでは考えられない。歴史は単に連続としてだけでは考えられないとなされるのもこの理由によるのであろう。歴史は物質的なものの連続的変化とだけでは考えられないのはもちろん、生命の生成とだけでも、又ある状態の発展とだけでも、考えつくされない。そこでは、決断による行為という営みにおいて、無的なもの永遠的なものにふれつつ、運命をかけてことが為されるという、歴史の持つ中核的意味が逸せられるからである。

各時代はそれぞれに完結したものとして、神にふれているともいわれるが、以上のように考えて来ると、歴史は時間における人の営みといえるとともに、人の決断的行為によって、そのときどきに、神にふれているもの、歴史は世俗のものでありながら、他面世俗を超えたものにふれているということができよう。以上のように、決断的行為において、神的なものにふれるからといって、決して人が神になるのではない、人間としての理性的存在者は、どこまでも有限的、相対的な存在者にすぎぬ。従って人のなす営み、そしてその営みによって実現されるところのものには、常に有限性と相対性とがつきまとい、それらはすべて、移ろい行くものという姿を脱し得ない。人間の歴史の営みが空しいものと歎かれるのも故なしとしない。結局すべては挫折に終るのでないかとさえ思われて来る。十八世紀以来、実にめざましい直線的進歩向上の道をたどって来た科学、それと結びついて力強く自然を征服して来た技術、人は神の力を得たのでないかと思わせられる程であったのに、到り着いたところは全地球の汚染であり、人命の危険である。人の営みは事志とたがうということの連続でないかとさえ思われる。歴史の営みは長い目で見れば、結局無意味でないかとさえ見えて来る。この道をたどればニヒリズムに陥らざるを得ない。

このことを痛切に味わえば味う程、この世俗の国を超えたものに心開かれる思いもする。歴史の営みの空しさは実に超越的なもの、永遠的なものからの呼び声、地上の空しさは、天上の国への呼び声、此の国の汚れはあの国の浄さへの誘いとも受け取られる。歴史の姿は神の国への誘いの姿とも見られるであろう。時間の表象に従って、決断的行為を通じて、歴史の営みをなしつつ、それに徹することによって、われわれは永遠の国に眼をさまされるといい得る。この道によって救われた先人は数多くある。われわれはその先例に倣うことはできるはずである。

真に歴史を理解しようとすれば身自ら決断的行為を実践し、それによって歴史的現実に徹しなければならない。この歴史的現実に徹することが哲学の意図とすれば、歴史と哲学との関連の深さを思うことができる。

以上の説明は、単に個人の時間表象に即した形でだけなされて来たが、人は単に個人としてだけでは生活し得ない。私のまわりには多くの汝がある。このことを抜きにしては、真に歴史的現実に即した歴史的生活はあり得ない。そこに、種族・民族・国家・人類等の問題が出て来ることは、今更いうまでもないが、今はそこまで立ち入るゆとりはない。今はただ歴史の理解は、歴史的現実の学としての哲学へ通ずる重要な道であり、また哲学によって歴史的現実の意味・構造を明かにすることは、歴史の理解にとって大きな意味があること、またそれを通じて、永遠的なものに覚め得ること、歴史の営みは、どこまでも世俗的なものでありながら、世俗を超えたものへの呼び声であることが理解されれば、一応

よしとされねばならぬ。歴史から哲学への道をたどっても、又哲学から歴史への道をたどっても、それを徹底すれば、永遠的なものに覚めざるを得ず、この永遠的なものに覚めることによって、有限的・相対的理性的存在者たる人々は真に深く愛しあうことができ、又その愛を通じて互に善意志をもって、時のうちにありながら、時を超えて相共に協力して、永遠の福祉にあずかりつつ喜びをもって、歴史的現実を建設しつつ、歴史的哲学的現実生活をなすことができるはずである。これが歴史の営みを遂行することであるとともに、深く哲学することにほかならぬと思う。

哲学に至る道は至るところに開かれている。カントは当時の科学の研究から哲学に入ったといえるであろうし、ベルクソンの哲学には生物学の研究が大きな力となったといえよう。逆に、それでは科学のなかった時代には哲学がなかったかといえば、そうはいわれない。生活に即して起る諸問題に促されて哲学はなされた。ここで大事なことは、科学を手にした人々が、それを手がかりに哲学をすれば、科学なき時代の人々に比べ、現実への切り込みが深いだけに、その哲学はより深く現実的であるといい得る。しかしその反面科学に捕えられすぎて、真に哲学に徹し得ぬ恐れもでて来る。科学はすべて特殊科学であって、それぞれに特殊の立場に立って研究するものであるのに対し、哲学はそれらの立場を超えて、存在そのもの、現実そのものと一になろうとするものであるからである。特殊科学としての歴史学がそのまま哲学なのではない。歴史と哲学との関連を考えるに当っては、この点は注意されねばならぬであろう。　　（終）　（昭和四七、八、六）

（これは、昭和四十七年度大手前女子大学夏期特別講座の講義内容をもとにして作成されたものである）